

短期派遣 EUROPA 派遣報告書
江畑 冬生（日本学術振興会特別研究員 PD）

分野名： チュルク諸語研究
テーマ： サハ語の派生形態論

[派遣の概要]

派遣目的は、ゲーテ大学（ドイツ・フランクフルト）における研究滞在および中東工科大学（トルコ・アンカラ）における口頭発表である。

7/2 に日本を出国し、イスタンブル経由で同日夜にフランクフルト・アム・マインに到着した。フランクフルト滞在中は、受入研究者の Andreas Waibel 氏のもと欧州におけるチュルク諸語研究について学ぶと共に、報告者の研究対象言語であるサハ語について報告する機会もあった。9月17日までフランクフルトに滞在したのち、やはりイスタンブル経由でアンカラへ向かった。アンカラでは、9月18日ー20日にかけて開かれた第16回国際チュルク諸語会議に参加した。国際会議ではサハ語の派生形態論に関する2件の口頭発表を行ったほか、世界各地からのチュルク語研究者と有益な意見交換を行った。9月22日にアンカラを出発し、再度イスタンブル経由により、翌23日に日本へ帰国した。

[研究]

欧州、とりわけドイツにおけるチュルク諸語研究の蓄積について学ぶという当初の目的については予想以上の収穫があった。

フランクフルト市のゲーテ大学は欧州有数の言語研究の拠点であり、チュルク諸語研究を推進してきた伝統がある。受入研究者の Andreas Waibel 氏は、チュバシュ語を専門としつつも広くチュルク諸語に通じ、古典語を含む多くの印欧諸語、さらにはバスク語やウラル諸語についての深い知識も有する。報告者はこれまで、サハ語の共時的文法構造の解明に関心を持ってきたが、反面、チュルク諸語の比較研究にはそれほど注意を払ってこなかった。ドイツにおける史的研究の蓄積はたいへん高いレベルにあり、中でも Waibel 氏のもとで比較研究を学べたことは極めて良い機会となった。

主な活動として、チュルク諸語研究会を開いて定期的に集まった。メンバーは Andreas Waibel 氏（ゲーテ大学）、妻の Zinaida Waibel 氏（ゲーテ大学）、ロシアのタタルスタン共和国より滞在中の大学院生 Nadiya Galieva 氏（カザン連邦大学）、報告者の4人である。この研究会は小規模ではあるが、英語・独語・露語による活発な議論が飛び交った。扱われた言語はハカス語・ショル語・チュバシュ語・タタル語・サハ語等であり、書籍資料からは情報を得にくいものも

多く有益であった。報告者も1度、発表を担当し、「The Yakut language, compared with other Turkic languages」と題する報告を行った。フランクフルト滞在中の同研究会において、特に Waibel 夫妻とのディスカッションにより得られたものは多大である。備忘も兼ねて、以下にチュルク諸語研究の問題点をまとめておきたい。

チュルク諸語には30余りの言語が属し、現在、ユーラシア大陸の東西に広く分布している。記録の残る最初期のものは、8世紀に遡る Old Turkic と呼ばれる言語である [von Gabain (1941), Erdal (2004)]。

欧州における近年の研究により、Old Turkic は必ずしも均質な存在ではなく、その内部に多様な変種を含むものであることが指摘されてきた [Berta (2005), ヨハンソン (2008)]。古代チュルク語は最初の分岐により East Old Turkic (以下 EOT) と West Old Turkic (以下 WOT) に分化した。EOT は現存するほとんどのチュルク諸語の祖先である。一方、WOT に遡るチュルク語として現在まで残るのはチュヴァシ語のみである。ただし、モンゴル語・スラブ諸語・サモエド諸語・ハンガリー語・コーカサス諸語 (グルジア語など) には、WOT との接触の跡が見られる。

報告者の研究するサハ語も、チュヴァシ語を除く他のチュルク諸語と同様、EOT に遡る言語である。ただし、モンゴル語からの大量の借用語の中には、モンゴル語が WOT から借用したと見られる要素も含まれる。すなわちサハ語は、同一のチュルク語の中に EOT と WOT の両方の要素が混在することになり興味深い存在である。

一方、南シベリア地域のハカス語やシオル語は、系統の異なる言語との接触が比較的少なかったこともあり、チュルク系語彙の含有率が最も高いチュルク語である。ただしこれらの言語は、標準語と現存する方言が食い違う (すなわち、すでに消滅した方言が標準語となっている) 点が問題である。

日本や欧州を含め、チュルク諸語研究の現状はオグズグループ (トルコ語・アゼルバイジャン語など)、キプチャクグループ (キルギス語・タタール語など)、カルルクグループ (ウイグル語・ウズベク語など) に集中するきらいがある。チュヴァシ語、ハカス語、シオル語、そして報告者の専門とするサハ語について、これまでに述べたチュルク諸語の史的展開および共時態を踏まえたより深い研究がますます必要とされる。

<引用文献>

Berta, Á. 2005. Neue Erkenntnisse zum Westalttürkischen. Paper given at the 6. Deutsche Turkologenkonferenz, 23.-26. July 2005, Frankfurt am Main.

Erdal, M. 2004. *A grammar of Old Turkic*. Leiden & Boston: Brill.

von Gabain, A. 1941. *Alttürkische Grammatik mit Bibliographie, Lesestücken und Wörterverzeichnis, auch Neutürkisch*. Leipzig: Otto Harrassowitz.

ヨハンソン・ラーシ 2008. 「古代チュルク語の地域性, 年代, 時代区分, 変種, 接触, 機能性についての覚え書き」 『東京大学言語学論集』 27号, 87-96.

第16回国際チュルク諸語会議への参加もやはり, 大きな収穫があった。この国際会議は2年に1度開かれ, 世界各地のチュルク語研究者が集まるものである。受入研究者の Andreas Waibel 氏も参加した。この国際会議では2件の口頭発表(1件は個人発表, もう1件はロシア・サンクトペテルブルクの言語学研究所の Arzhaana Syuryun 氏との共同発表)を行った他, 報告者と同じくサハ語を研究する Károly László 氏の知己を得るなどの収穫があった。以下では, 報告者による口頭発表を含むいくつかの発表の内容を紹介することで報告としたい。

Tooru Hayasi and Sumru Özsoy. “Şu or bu/o: Turkish nominal demonstratives with concrete referents.”

トルコ語指示詞の3つの系列について, 母語話者が共同で作業を行う場面を録画した資料に基いた調査結果が示された。*bu* および *o* は主に名詞句として用いられるのに対し, *şu* はしばしば連体的に用いられる。また *şu* は常にジェスチャーを伴うのに対し, *o* は相対的にジェスチャーを伴う場面が少ない。統計的資料に基づき, *bu* および *o* は距離に関わり, *şu* は聞き手への注意喚起が行われることを結論づけた。

Lars Johanson. “So close and yet so distant: On Turkic core structures, genealogical and typological grouping of varieties, and mutual intelligibility.”

チュルク諸語は中核的言語特徴を共有する系統グループである。チュルク諸語内の変種同士の相違の度合いを調べるのにいくつかの方法が提案されているが, 不確かなものである。チュルク諸語に共通の言語特徴は, チュルク諸語以外にもあてはまることが多い。アスペクト・モダリティ・エヴィデンシャルティこそが, チュルク諸語独自の特徴と言える。言語接触により他の言語の文法構造の影響を受けたチュルク語であっても, これらの文法範疇はチュルク的である。むしろ周囲の非チュルク語に影響を与えているケースもある。

Fuyuki Ebata and Arzhaana Syuryun. “Derivation from plural stems in Tyvan and Sakha.”

通言語的に屈折プロセスは派生の外側で起こるのが通例であり, チュルク諸

語においてもそうである。ところが、チュルク諸語のうちトゥバ語およびサハ語では、屈折接辞の1つである複数接辞に派生接辞が後続する現象がある。複数接辞に後続しうる派生接辞は、トゥバ語に2つ、サハ語に4つある。このような「非典型的」派生は、屈折と派生の区別が離散的ではないこと、脱範疇化は段階的であることの2点から説明されうる。

Fuyuki Ebata. “Valency retention in Sakha (Yakut) derivational nominalization.”

派生による名詞化と屈折による名詞化の間には、振る舞いの違いがあることがしばしば指摘される。サハ語には3種類の名詞化の方策が認められる。そのうちの1つである統語的派生は、動詞の項構造を保つという特徴を有するにも関わらずあくまで派生である点で通言語的に特異である。この特徴は通言語的に主張される *Lexical integrity* 仮説に反するものである。動詞から派生した行為名詞は、諸言語でしばしば名詞と動詞の中間的振る舞いをするのが指摘されるが、サハ語の統語的派生は行為名詞だけでなく行為者名詞および可能名詞もある点が興味深い。

[ドイツ語学校]

報告者は学部在籍中にドイツ語を履修した経験があったが、受入研究者の Andreas Waibel 氏の勧めもあり、今回の滞在に際しドイツ語を学び直すべく語学学校へ通うことにした。フランクフルト市内の Zentrum という語学学校に、7/9 からの2か月間通った。授業は月曜日から金曜日まで週に5日、1日に3時間行われる。言語学の専門家として改めて学ぶドイツ語文法には新たな発見があった。1例を挙げると「1リットルの牛乳」は *ein Liter Milch* となるが、冠詞の性が名詞ではなく単位である「リットル」と一致する点は、名詞句の構成を考える上で興味深い現象であると言える。

7/27 には、語学学校の他の日本人学生を聴衆として、「言語とは何か、言語学は何を明らかにするか」と題する講演を行った。言語本質論・言語の構造・世界の言語について適宜質問を受け付けながら語った。参加者からは「ドイツ語も世界に数千もある言語の中の一つであり、大きな語族の流れの中で徐々に枝分かれし変容して行った事が分かった」などの感想が寄せられた。

[生活]

報告者はこれまでほぼ毎年、ロシアのシベリアにおいてフィールドワークを行っている。ロシア滞中に比べれば、ドイツでの生活の方が遥かに容易なものであり、大きな問題は無かった。ただし、住居については若干のトラブルがあった。

日本を出発する前、Waibel 氏と連絡を密に取りながら、滞在の準備を行った。最も大きな問題が住居であったが、Waibel 氏の御教示により短期間のアパート貸し借りの情報を載せたサイト <http://www.studenten-wg.de/>により部屋探しをし、Rödelheim 地区のアパートを出発前の段階で押さえることができた。7/7 から借りる契約となったので、フランクフルト到着の 7/2 から 7/7 までは市中心部のホテルを予約し日本を出国した。しかし現地到着後、貸主との連絡・交渉がうまくいかず、Rödelheim 地区のアパートの件は結果的に破談となった。そのため急遽ホテルでの滞在を 1 泊延長し、代わりの住居探しを開始した。幸いにも Waibel 氏の知人が海外出張中で不在となるアパートを快く提供してくれたお陰で「宿なし」となることは回避した。その後もアパート探しを続け、7/25 には Eschersheim 地区の別のアパートへ転居することができ、フランクフルト滞在期間の終わりまで居住した。一時帰国する日本人留学生のアパートで、月額 440 ユーロである。こちらには wifi があったことも重宝した。

[通信]

電話に関しては、7/7 にプリペイド式の Sim カードを購入した (Vodafone)。電話機本体は普段ロシアで使用している Nokia のものを用いた。この Sim カードはトルコでも自動的に使えたのは便利であった。

ネットに関しては、最初の数日間のホテル滞在中はホテルにある PC からネットに接続した。報告者は正規の留学生ないし訪問研究員では無かったため、ゲーテ大学のアカウントを使うことができなかった。そのため USB スティックを購入しデータ通信によるネット接続をしていたが、通信速度が非常に遅く研究に支障が出るほどであった。7/25 に新しいアパートに移ってからは、wifi のお陰でネット接続のトラブルは解消した。

第 16 回国際チュルク諸語会議では、会議期間中、会場の中東工科大学の wifi を使うことができた。

なお提案として、大学間のネット使用の提携である eduroam への加盟してはどうだろうか。ゲーテ大学・中東工科大学のどちらも、eduroam のアカウントを持っていればネットが使えるようであった。報告者のような短期滞在者にとっては便利である。東京外大として加盟を検討して頂きたい。

[その他]

報告者は正規の留学生ないし訪問研究員では無かったため、ゲーテ大学の図書館利用証を作れなかったが、フランクフルト市の市民登録をすることで利用証を発行することが出来た。これは、ゲーテ大学の図書館が市の図書館を兼ねているという点に気付いた Waibel 氏の機転である。

[連絡状況]

受入研究員の **Andreas Waibel** 氏には, 研究面だけでなく生活面にわたっても全面的にバックアップしていただいた。一方, 呉人徳司准教授 (日本における受入研究者) とは, 電子メールにより研究上の意見交換や国際シンポジウム (2012年 12 月) 開催準備の打ち合わせなどを行った。